青森市立三内中学校

平成 29･30 年度新しい時代を主体的に

青森市立三

研究

ダイジェ

≪研修主題

目指す子ども像の具現

小中一貫

～ 一人一人が自己有用感をもて

「分かる授

≪目指す子ども像

・主体的に学習に取り組み、

・子ども同士の交流を通して

行動ができる子ども

・強い心と体をつくる子ども

小・中学校9年間を見通した

踏まえた学習指導の共通

・学習習慣の育成（学習の約束

・ユニバーサルデザインの視点

・話合いの仕方、協働的な活動

・「見通し」と「振り返り」の工夫

自己有用感をもてる

各教科での取組

生徒が主体的に取り組み、自己有用感をもたせる授業

○主体的な学びを実現するためのキーワード

「課題提示」、「見通し」、「自力解決（自分の考えをもつ）」、「学び合い（対話）」、「まとめ」、「振り返り」

9年間の単元配列表の作成

小学校との系統性・連続性を図った指導内容の整理と指導方法の共有

小学校への乗り入れ授業

・指導計画の共同作成

・指導方法の共有と共通理解

、「各教科」における重点実践事項

・学び合う協働的な活動の工夫

・思考や気付きを促す発問や指示の工夫

・主体的・対話的（協働的）な学び合い活動の工夫（ペア・小集団）

・学習の振り返りの場の設定と評価の工夫（自己評価・相互評価等）

・授業に主体的に取り組む生徒を育成するための指導事項（考えをもつ、考えを伝える、反応を返す）

道徳での取組

生徒同士の話合いを通し、よりよい生き方について考えを深める

小学校の授業形態を生かした連続性のある指導

小学校教員との TT による授業実践

・範読や発問の役割分担

・生徒の発言を広げ深めていく発問や指示の工夫

道徳における重点実践事項

・思考を揺さぶる発問・指示の工夫

・心情を「視覚化」させる工夫

・他者との比較から自己の考えを深めさせるための活動の工夫

・振り返りの場の設定の工夫

学習習慣育成のため

≪学習の約束≫

1　**忘れ物ゼロ**

宿題・学習用具を忘れないようにしよう。

2　**チャイム前着席**

次の学習の準備をし、３分前に着席しよう。

3　**授業に集中**

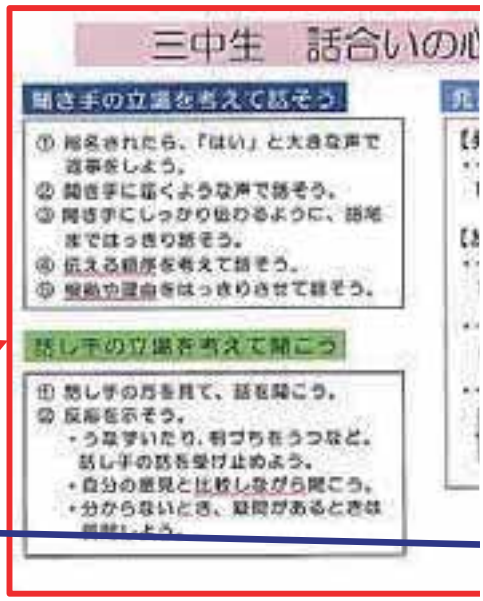
説明や発表をしっかり聴き、学んだことをノートに整理しよう。

4　**進んで表現**

学んだことを生かし、積極的に自分の考えを表現し合おう。

5　**家庭学習の充実**

進んで家庭学習に励み、学んだことをしっかりと身に付けよう。



切り拓く小・中学生育成支援事業
内中学校
概要
スト版

要≫
化を図る
教育の実践研究
る
業」の実践を通して ～

≫
、表現できる子ども
て、思いやりをもった
ら

、系統性・連続性を
実践
束、家庭学習の手引き）
点を取り入れた授業
動の工夫
夫

る「分かる授業」

総合的な学習の時間での取組

小学校との系統性を踏まえた探究的な学びの推進

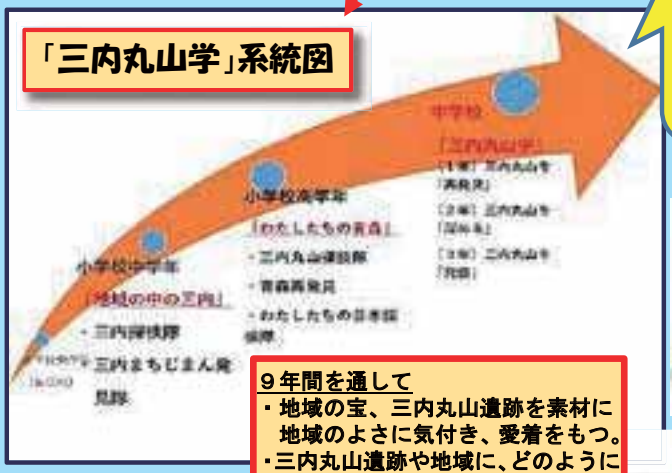
地域を生かし
地域のニーズ
に応える

職業や自己の生き方を
考える「キャリア学習」

探究的な学習の過程において、学んだことを相手に分かりやすく、自信をもって伝える（発信する・表現する）方法と内容の工夫に重点を置き、自己有用感につなげる

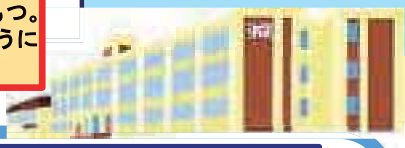
地域や学校の特色を
考える「三内丸山学」

「三内丸山学」系統図

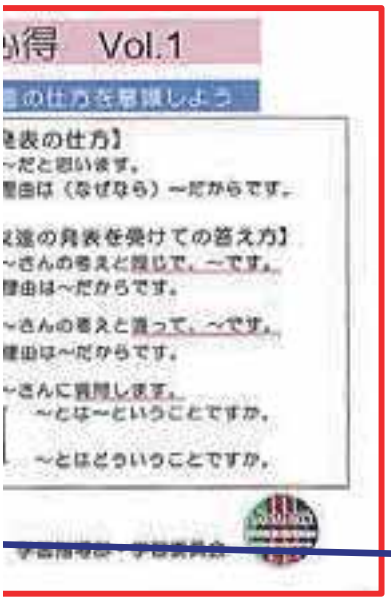


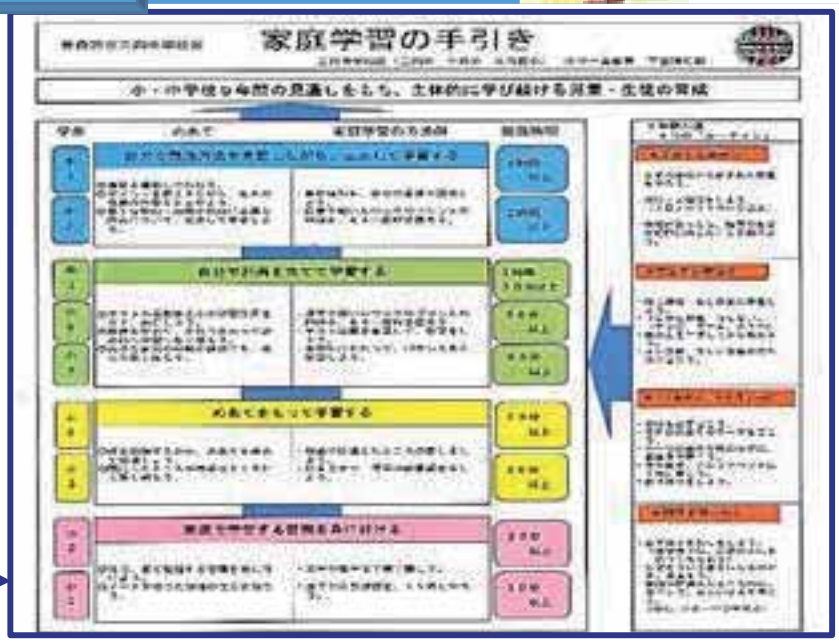
キーワードは
1年「再発見」
2年「深める」
3年「発信」

9年間を通して
・地域の宝、三内丸山遺跡を素材に地域のよさに気付き、愛着をもつ。
・三内丸山遺跡や地域に、どのように関われるかを考える。



の小・中共通実践事項





１　研究の概要

（１）研究目標

目指す子ども像の具現化を図る小中一貫教育を、教科等の系統性・連続性を踏まえた学習指導と「分かる授業」の実践研究を通して明らかにする。

○三内中学校区の目指す子ども像　（三内中・三内西小・三内小） ・主体的に学習に取り組み、表現（活用）できる子ども ・子ども同士の交流を通して、思いやりをもった行動ができる子ども ・健康で安全な生活を送り、強い心と体をつくる子ども

（２）研究の取組

①　主体的な学習の基盤となる学習習慣の育成

ア　学習習慣の定着

・３校共通の「学習の約束」

・家庭学習の習慣化　→　９年間を見通した「家庭学習の手引き」

イ　授業に主体的に取り組む生徒の育成

・２つの小学校の「発表の約束」との系統を図った「三中生話合いの心得」の指導

・小・中学校共通実践事項

・視覚に訴える働き掛けを取り入れるなどして、全ての生徒が「自分の考え」をもつことができるようにする。 ・自分の考えを友達に聞こえる声で伝えようとする態度を身に付けさせる。 ・友達の話を最後まで聞き、反応を返そうとする態度を身に付けさせる。

ウ　ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業と教室環境

・視覚化の工夫　→　掲示シート、チョークの色分け、ＩＣＴ機器の活用

・焦点化の工夫　→　活動のねらい、時間配分、簡潔で分かりやすい指示や説明

・共有化の工夫　→　「学習の流れ」の掲示、ペア・小集団活動

②　自己有用感をもてる分かる授業

ア　主体性をもたせる工夫

主体的な学びを実現するために、 「課題提示」、「見通し」、「自力解決（自分の考えをもつ）」、「学び合い（対話）」、「まとめ」、「振り返り」の場の設定

・小学校との系統性・連続性を踏まえた指導の工夫（学習内容・指導方法）

・生徒一人一人が興味・関心、学習の見通しがもてる課題設定の工夫→前時の振り返り

・課題解決の見通しをもたせるための手順や方法の工夫　→　既習事項の活用等

イ　対話的で深い学びの工夫

・学び合い活動の工夫　→　活動のねらいの明確化、話合いの仕方

・思考力の育成　→　考えるための技法（思考スキル）、思考ツール

・思考や気付きを促し、表現力を高めるための発問や指示の工夫

→　発言を広げる、深める（教師と生徒、生徒と生徒の双方向）

・学習の振り返りの場面設定の工夫（自己評価、相互評価、演習等）

自分が何をどのように学んだかを振り返る 分かったこと（できるようになったこと）、新たな疑問やもっと調べてみたいこと、友だちの考えで参考になったこと、これからの学習や生活に生かしたいこと

③　９年間を見通した教育課程編成と実施

ア　各教科（外国語活動を含む）の系統性と連続性を重視した指導計画の作成と実施

・学習状況調査と標準学力検査の分析を生かした「９年間の単元配列表の作成」

イ　系統性をもたせた総合的な学習の時間の指導計画作成と実施

・地域学習「三内丸山学」と地域との関わりをもたせた「キャリア学習」

ウ　各分掌（教務・学習・特活・生徒指導・特別支援）での統一性、一貫性をもたせた指導のための小中一貫教育推進会議の実施

④　学校間連携体制の充実

ア　相互乗り入れ授業による学習指導

イ　小学校との系統性・連続性を踏まえた指導計画や指導案の共同作成

ウ　小中合同研修会、授業参観、学校行事等での教職員間の交流

エ　中学校への部活動の参加や生徒会行事等の交流、特別支援教育の連携

オ　児童生徒の意識調査及び教師の自己評価の実施と改善に向けた取組

（３）研究経過（平成２９年度、３０年度）

実践項目	実施内容	備　考
市教委指導課学校訪問	・小中一貫カリキュラム開発普及事業の説明 ・仮説に基づく授業実践と研究協議	市教委
小中一貫教育研究推進委員会（年７回）	・研究計画の確認と情報共有 ・系統性、連続性を重視した指導計画の作成や指導方法の共通理解 ・児童生徒の意識調査及び教員の自己評価における各校の情報交換 ・２小学校の CRT の結果分析を受けた４教科の重点指導内容の洗い出し ・児童生徒の交流活動の計画　等	各指導部長、担当教師
３校合同研修会（年３回）	・標準学力検査（NRT･CRT）の分析結果の報告 ・児童生徒の意識調査と教師の自己評価の結果について ・児童生徒理解のための調査法の活用「アセス」の理解と活用（平成 30 年） 青森県学校教育センター教育相談課 指導主事　田中　道介　氏	３校（三内中、三内西小、三内小）の教師 市教委
公開授業、研究授業等	・中教研研究集会英語科、道徳授業発表 ・青森県学力向上フォーラム実践発表、授業発表（理） ・実践研究校公開発表会（29、30 年度） ２９年度（中１：国、社、数、英、道 小６：理） ３０年度（中１：社、数、英、道 中２：総合的な学習の時間） ・WEB 授業動画の撮影（英）	平成２９年度 講演：学校教育研究所 理事長 若月秀夫 氏 平成３０年度 講演：甲南女子大学 教授 村川雅弘 氏
小中乗り入れ授業	平成２９年度 ・５、６年の国・社・算・理・音・体 ・５、６年の外国語活動 平成３０年度 ・６年の社・算・体、５、６年の外国語	 三内西小 三内西小、三内小 三内西小、三内小

２　理科での実践

１学年　理科　学習指導案

（１）　単元名　　水溶液の性質

（２）　単元指導計画

①　単元の目標

・物質の水への溶解の様子を、粒子モデルを用いて表すことができる。
・質量パーセント濃度の表し方を理解し、計算して求めることができる。
・水溶液中の温度を下げたり、水を蒸発させたりすることで溶質を取り出すことができることを、溶解度と関連させて説明できる。
・再結晶は、混合物から純粋な物質を取り出す方法の一つであることを説明できる。

②　単元における「主体的・対話的で深い学び」の視点

・主体的な学びとして、導入時で実物を提示することで【興味や関心を高める】。また、前時の復習の板書の内容や小学校時の教科書提示を行うことで、既習事項を用いて課題を解決できるという【見通しをもつ】ようにさせる。
・対話的な学びとして、予想や考察場面で小集団による【互いの考えを述べ合う】場を設定する。話合いでは、相手の意見を【自分の考えと比較】しながら聞くようにさせ、次に自分が意見を述べるときには、相手の意見に対する自分の立場を明確にしてから発言させる。また、予想や結論に対する根拠や理由を考えさせることで【協働して課題を解決】できるようにする。
・深い学びとして、小学校や前時までの【知識・技能を活用】して予想したり解決したりできる学習課題を設定する。終末では、学習した内容や実験結果をもとに、自分の言葉で考察やまとめを書かせることで、【自分の考えを形成する】ことにつなげる。また、自己評価内の感想には、疑問や発見及び日常生活との関連性を中心に書くことで、日常生活や社会との関わりを実感させ、学びに向かう力を涵養させる。

③　単元における「見通し・振り返り」について

導入場面では、小学校や、前時までの既習事項や実物を提示するなど、小中一貫教育で取り組んでいる視覚に訴えた働き掛けをすることで課題への見通しをもたせる。また、根拠ある予想と、実験結果に対する仮説を明確にすることで見通しをもたせ、実験後に学習課題に対する結論（考察）を自分の言葉でまとめることで学習の振り返りとする。さらに、終末の自己評価では、校内研修や小中一貫教育の取組である主体的な学びの視点「相手に聞こえる声で伝えたか」「相手の意見を自分と比較して聞く」を評価項目に入れ、自分の取組を振り返らせる。また、感想では「疑問」「発見」「日常生活との関連性」という観点で書かせるようにする。これは、育成を目指す資質・能力の「学びに向かう力、人間性等」に当たり、日常生活や社会における科学の有用性を実感させることや新たな問題を見いだそうとする感性及び知的好奇心の育成につながるものと考える。

（３）　本時の指導

①　**題材名**　水溶液から溶質を取り出そう（４／４）

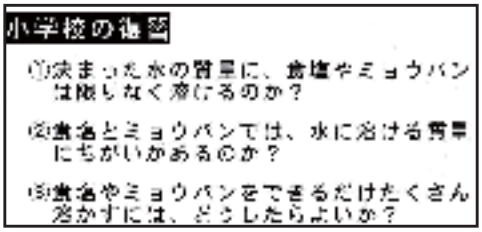
②　**目　標**　硝酸カリウムと食塩の混合物を分ける実験を通して、水溶液の温度を下げることで溶解度の変化が大きい硝酸カリウムだけを取り出せることを、自分の言葉でまとめることができる。

③　**展　開**　（※点線囲みは、校内研「学び合いの工夫」「振り返りの工夫」の設定場面）

段階	教師の働きかけ	予想される生徒の反応	形態	評価・留意点
	１　食塩や硝酸カリウムの水溶液から、溶質を取り出すにはどう	１・食塩は、溶解度の変化が小さいので水溶液を加熱し水	一斉	・前時で学習した溶解度曲線を提示する。

本単元は特に、小学校で学習した内容との系統性が大きいので、単元の導入時に小学校の教科書を提示しながら、どのような内容を学習したのかを復習する場面を設定した。

【単元の導入で用いた小学校の復習】


小学校の復習

①決まった水の量に、食塩やミョウバンは限りなく溶けるのか？

②食塩とミョウバンでは、水に溶ける量にちがいがあるのか？

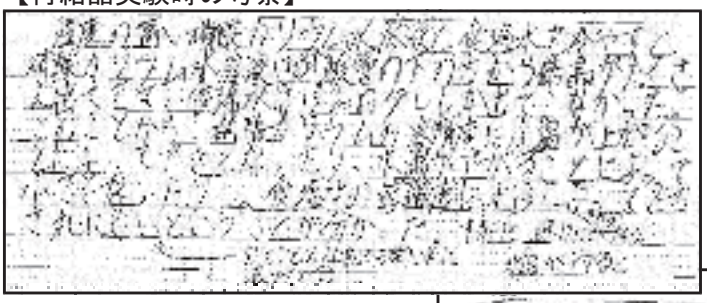
③食塩やミョウバンをできるだけたくさん溶かすには、どうしたらよいか？

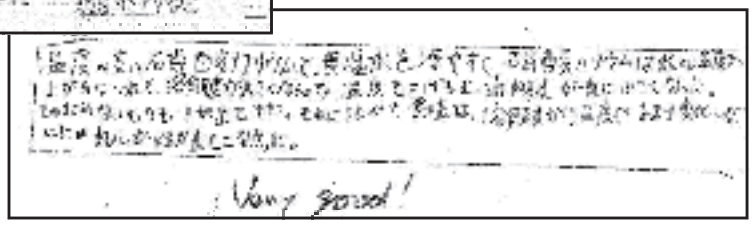
話合いの場面を設定し、話合いのルールを決めて実施した。これは、本時の場面でも行っているので、詳しくは本時に示した。

振り返りとして、考察またはまとめを自分の言葉で書かせるようにした。そして、自分の言葉で書けたのかどうかを振り返るために、自己評価欄にその項目を設けた。

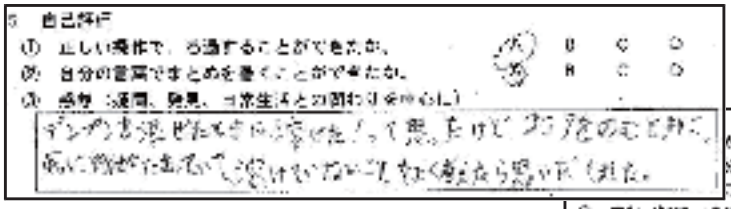
また、自己評価の最後に「感想」欄を設け、疑問・発見・日常生活との関連を中心に書くよう指導した。

【再結晶実験時の考察】

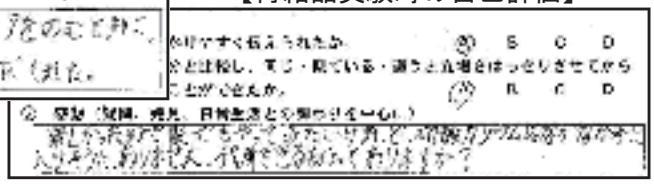




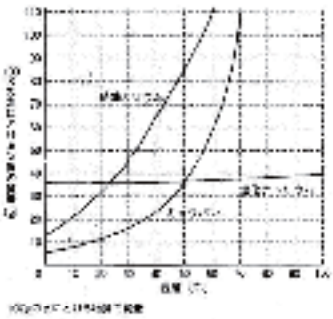
【ろ過実験時の自己評価】



【再結晶実験時の自己評価】



既習事項を用いて解決する学習課題につなげるために、導入時に前時までの復習を行った。また、溶解度曲線のグラフを提示することで、課題解決の手立てにできるようにした。



【授業で提示した溶解度曲線のグラフ】

導 入 (5)	すればよいですか。 また、それはなぜですか。 ・固体の硝酸カリウムに少量の食塩を混ぜる。	を蒸発させて溶質を取り出す。 ・硝酸カリウムは、溶解度の変化が大きいので、水溶液の温度を下げて溶質を取り出す。		【興味や関心を高める】	
展 開 (35)	2　学習課題を確認しましょう。 硝酸カリウムと食塩の混合物から、硝酸カリウムを取り出すにはどうすればよいだろうか。 3　どのようにすれば取り出せるかを予想し、理由を付けて話し合いましょう。 ・班での予想を発表させる。	3・硝酸カリウムは溶解度の変化が大きいので、水溶液にして冷やすことで結晶が出てくる。しかし、食塩は溶解度の変化が小さいので、温度を下げても結晶は出てこない。 ・食塩は、温度を下げた後の水溶液を蒸発させれば、結晶が出る。 ・ろ過は水に溶けない物質を取り出す方法だから、ろ過では取り出せない。	一斉 個 ↓ グループ ↓ 一斉	【見通しをもつ】 【知識・技能を活用する】 【互いの考えと比較する】 評価１ 方法：机間指導、発表 硝酸カリウムと食塩を水溶液にして再結晶させることで、純粋な物質を取り出せることを溶解度を根拠に説明できたか。 手立て：掲示している溶解度曲線を確認させる。	
	4　今日は、硝酸カリウムを取り出す方法を確認し、実験しましょう。	4　①粉末の混合物を水に溶かし、溶け残ったら湯であたためてすべて溶かす。 ②水溶液を水で冷やし、結晶が出てくるようすを	一斉	・実験方法については、前時までの方法を参考に、できるだけ生徒から意見を出させて確認する。	

【物質を混合している様子】

課題に切実感をもたせるために、生徒が見ている前で硝酸カリウムと塩化ナトリウムを混ぜて見せた。そのことによって、学習意欲が増し、その中から硝酸カリウムを取り出すのだ、という課題意識をもたせることができた。　【興味や関心を高める】

【話合いの活動の様子】

課題に対する自分の予想（考え）をもたせたあと、実験班（３～４名で構成）の中で話合いにより、各自の予想を検討させた。

【見通しをもつ】

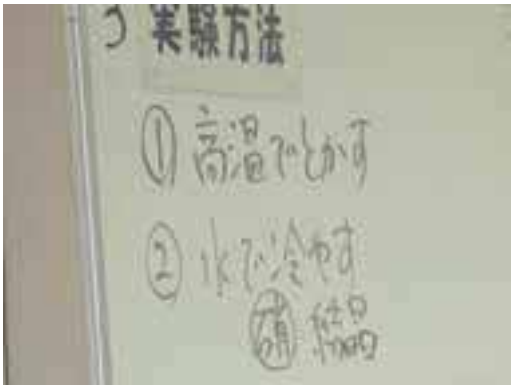
〈話合いのルール〉

・司会者は毎回持ち回り
・司会者の左隣の生徒から順番に意見を述べる。
・前に発表した人の考えと比較し、同じ・似ている・付け加える・違うという立場を明確にしてから、自分の考えを述べる。

このような方法を繰り返し行ってきたため、本時では既習事項を用いることと、相手と比較しての意見の述べ方や話合いがおおむねできていた。

【知識・技能を活用する】
【互いの考えと比較する】

【実験方法についての板書】



前時までに学習したことを生かせるように設定した学習課題なので、実験方法も生徒とともに確認した。

しかし、固体である混合物を溶かすことから始めるイメージのなかった生徒も少なくなかったので、補足説明が必要であった。

展 開 (35)	5　実験結果を確認しましょう。	観察する。 ③白い柱状の結晶なら硝酸カリウムで、立方体の結晶なら食塩であると分かる。 ・実験する。 5・水溶液の温度を下げると柱状の硝酸カリウムの結晶は出てきたが、立方体の食塩の結晶は出てこなかった。	グループ 一斉	【協働して課題を解決する】	
ま と め (10)	6　まとめましょう。 硝酸カリウムと食塩の混合物から硝酸カリウムを取り出すには、粉末の混合物をいったん高温の水に溶かしてから温度を下げるとよい。すると、溶解度の変化が大きい硝酸カリウムは結晶として出てくるが、溶解度の変化が小さい食塩は水に溶けたままである。 7　今日の授業の自己評価と感想を書きましょう。	7・水溶液に溶けたままの食塩は、どのようにしたら取り出せるのだろうか。 ・再結晶は、蒸留と同じで混合物から物質を取り出すのに便利だと思った。	一斉 ↓ 個 個	【知識・技能を活用する】 評価２ 方法：机間指導、記述 硝酸カリウムと食塩の混合物を水に溶かし、温度を下げると、溶解度の変化が大きい硝酸カリウムだけが結晶として出てくることを、説明できたか。 手立て：予想場面で書かれた板書を確認させる。 ・感想には、疑問に思ったこと、発見したこと、日常生活との関連性等の視点で書かせる。 【思考して問い続ける】 【知識・技能を概念化する】	

実験結果について、結晶の違いで硝酸カリウムが析出したことを確認させるために、実験前の段階でどういう結果になったら予想を検証したことになるのか、仮説を立てさせた。

生徒からその仮説を出させるために、前時までに既習事項として定着させるように工夫した。

また、仮説を立てさせることは、この学年が小学校６年の時に乗り入れ授業をした際にも行った。

【協働して課題を解決する】

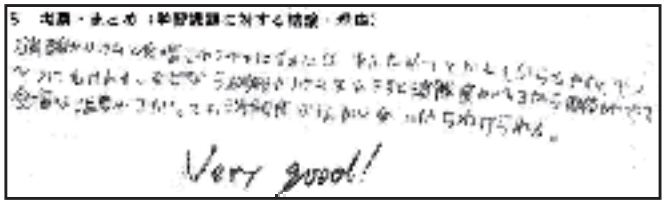
【析出した硝酸カリウムの結晶】

まとめでは、実験結果と実験前の仮説を全体で確認した後、予想と仮説及び実験結果をもとに各自にまとめをさせた。板書には、まとめに用いる内容が何なのか分かるように、色分けして示した。

また、まとめの書き出しは、「学習課題」と同じにすると良いと日頃から指導している。学習課題は、まとめの文章を生徒が書き出しやすくなるように工夫している。

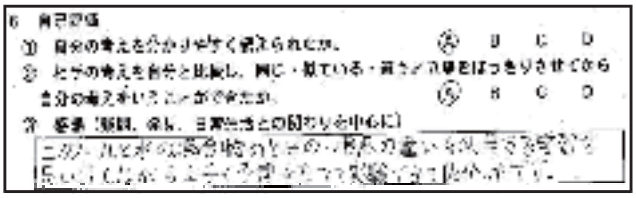
【知識・技能を活用する】

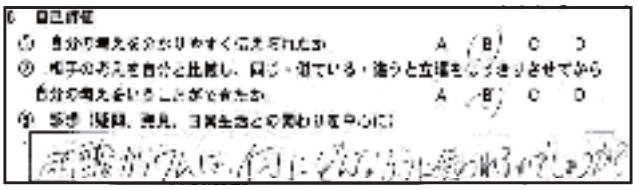
【生徒の考察】



振り返りとして、自己評価には、「話合いの様子について」と「考察やまとめの書き方について」の項目を入れた。これは日頃の授業でも実施している。

【生徒の自己評価】



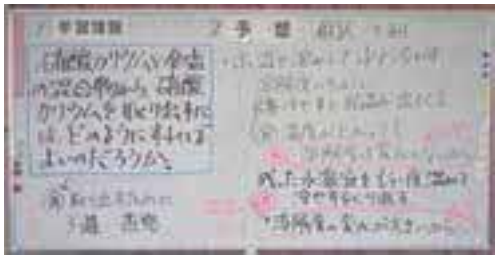


自己評価の項目の最後に、「感想」欄を設け、疑問や発見及び日常生活と関連したことを書かせるようにし、学び続ける姿勢をもたせるよう工夫している。

【思考して問い続ける】

【知識・技能を概念化する】

【本時の板書】



３　英語科での実践

１学年　英語科学習指導案

（１）　題材名　　「Talking Time 校舎を案内しよう」　（２／２）

単元の目標

道案内で使われる特有の表現のうち基礎的なものを学び、ALT に自分たちの校舎を案内することができる。

（２）　９年間を見通した学習指導～小・中学校における学習の系統性～

①　学習内容の系統性

本単元「校舎を案内しよう」に関わる小学校での学習内容は、第６学年 Hi, friends! 2 Lesson ４で、Turn right /left. や Go straight. などの方向や動きを指示する表現を使って相手に道案内することを主な活動として学習してきている。中学校では、さらに「階段を上る、降りる」や「～番目の部屋」などの表現を加え、生徒の学校生活に密着した場所の名前についても学習し、詳しい道案内ができるようにする。

②　小中一貫教育としての共通した学習指導法について

自分の考えをもつことができるよう、相手が行きたい場所までの道順を分かりやすく伝えるために、既習事項の文の組み合わせ方や話し方に注目させる。ペア活動や発表の場面では、小学校から継続しているアイコンタクトやクリアボイス、ナチュラルレスポンスなどの発表のポイントを意識させて取り組ませる。

（３）　ねらい

校舎を案内する表現について、英文を聞いたり話したりする活動を通じて、相手の行きたい場所までの道順を分かりやすく説明することができる。

（４）　本時における「主体的・対話的で深い学び」の視点

・主体的な学びとして、ALT の友達からのビデオレターを活用した学習課題を提示することで、生徒の興味・関心を高め、課題解決への意欲をもたせる。

【興味や関心を高める】

・対話的な学びとして、課題を達成するために段階を踏んだ言語活動を設定し、教え合いながら協力して課題に取り組むことで、生徒の表現する力を育てる。

【協働して課題を解決する】

・深い学びとして、架空の中学校の校舎を案内する練習をした後、それを基に三内中学校の校舎を案内する発展的な課題に取り組ませる。　【知識・技能を活用する】

（５）　展　開　（※点線囲みは、校内研「学び合いの工夫」「振り返りの工夫」の設定場面）

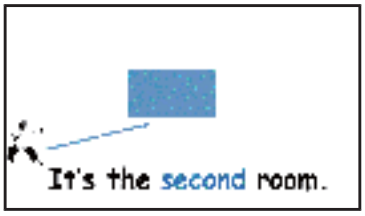
段階	教師の働きかけ	予想される生徒の反応	形態	評価・留意点
導入 (5)	1　where を使って、場所を尋ねたり答えたりしましょう。	1　ペアで活動する。	ペア	
展	・学習課題を確認しましょう。		一斉	・ジェフ先生の友達からのビデオレターを見せる。 【興味や関心を高める】
	ジェフ先生の友達に、三内中学校の校舎を案内しよう。			
	・課題解決の見通しをもちましょう。		一斉	
	2　道順を説明する表現を確認しましょう。	2　絵を見て口頭練習をする。	個	・道順説明に使う指示を表す絵を使用する。
	3　相手に分かりやすく校舎を案内するた	3　分かりやすく校舎を案内するためのポイントを	一斉	・校舎平面図を黒板に写す。

小学校で学習した道案内の表現をもとに、階の移動や「～番目の部屋」というもっと詳しい説明が必要な状況へ発展させた。
自分達の校舎を ALT の友達に案内するという具体的な場面を設定し、生徒が「やってみたい。」と思えるような学習課題になるように工夫した。

小学校の外国語活動で学習したことを再度実施した。案内の指示を聞いて体を動かしたり、小学校で使った学区の地図を見ながら、道案内の説明を聞いて経路をたどったり目的地までの道順をペアや全体に説明したりした。道案内の表現はほとんどの生徒が覚えており、再度行ったことで復習になり、本単元の活動にスムーズにつなげることができた。

小学校で使った地図には足跡があったが、今回は足跡がないため、どのような表現が必要かを考えさせたところ、「～階にある。」「～番目の部屋。」などが出された。道順の説明に使う表現や教室の名前などは Power　Point を使ってスライドで提示したので、日本語を介さずにどんどん練習することができた。

【道案内の表現や教室の名前の練習で使用したスライド】



【ペアでWhere is ～? It's ～.の復習】

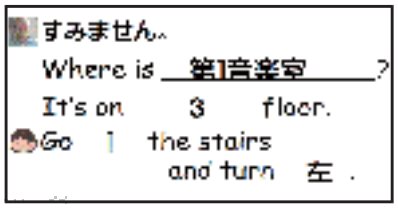
【ALTの友達からのビデオレター】

ALT の友達からのビデオレターを見せて学習課題を提示した。友達はねぶたが好きで三内中学校にねぶたを見に行くので、そのときに校舎を案内して欲しいと話し、生徒が校舎を案内する必然性をもたせた。

	めのポイントを考えましょう。 4　校舎を案内する会話文を練習しましょう。 5　青森中学校の校舎を案内し、教室の場所を探し出しましょう。 【活動の手順】 ①Ａは教室の場所をＢに尋ね、Ｂは説明する。 ②ＡはＢが話した道順をたどり、教室の場所を確認したら､校舎平面図に教室名を記入する。 ③役割を交替し、校舎平面図の完成に向けて活活動する。 ・教師のデモンストレーションで確認しましょう。 ・発表するときのポイントに気を付けて校舎案内をしましょう。	考える。 4　基本モデル文を使い、口頭練習をする。 5　教室の場所を尋ねる側と案内する側に分かれ、ペアで活動する。 ・デモンストレーションを見て、活動の手順を確認する。 ・アイコンタクトやクリアボイス、ナチュラルレスポンスに気を付けて校舎案内をする。	一斉 個 ペア	・ALT と T2会話から何が必要かを考えさせる。 ・インフォメーションギャップを用いたワークシートを使用する。 【協働して課題を解決する】 ・ALT と T1でデモンストレーションを見せる。 評価１ 方法：机間指導 相手が知りたい教室までの道順を、分かりやすく案内することができたか。 手立て：口頭練習で用いた英文を、スライドで黒板に表示する。 ・教師３名は、分担して全てのペアの校舎案内の会話を確認する。
開 (30)				
ま と め (15)	6　ジェフ先生の友達に三内中学校の校舎を案内しましょう。 S1: Excuse me.　Where is the art room? S2: It's on the third floor. Go up the stairs and turn left. It's the first room.　OK? S1: Oh,　I see.　Thank you. S2:You're welcome. ・発表しましょう。 ・今日の学習を振り返りましょう。 7　自己評価をしましょう。	6　ペアで三内中学校の校舎を案内し合う。 7　学習の達成度を記入する。	ペア 個	【知識・技能を活用する】 評価２ 方法：机間指導、発表 三内中学校の平面図を見ながら、ジェフ先生の友達が行きたい場所に案内することができたか。 手立て：口頭練習で用いた英文に再度注目させ、ペアで英文を確認させる。

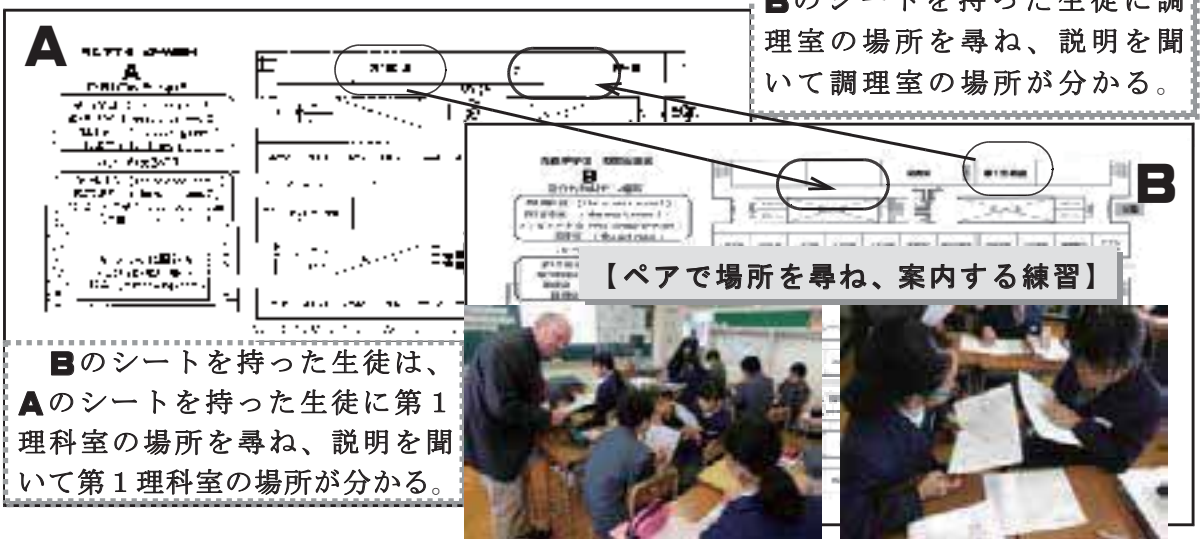
生徒からは、相手がわかるスピードで話す、説明の順序を分かりやすくする、という意見が出た。しかし、相手が説明を理解しているかどうかを確認することや、理解できたらそれを伝えることが大切であることを押さえるのが不十分だった。小学校から指導しているナチュラルレスポンスの視点からも、「相手意識をもつ」ということを日頃から意識させていきたい。

【口頭練習で用いたスライド】



「青森中学校」は三内中学校と同じ校舎平面図を用いて、教室の場所を入れ替えたものとした。T1、T2、ALT の3人で分担し全てのペアの対話を聞くことで、個々の生徒の状況を把握することができた。ここまでの練習を繰り返し行うことで、スムーズに道順を説明し、相手の説明を理解していた生徒が多かった。活動がなかなか進まないペアには、どのような順番で説明すればよいかや使う表現を確認するなどして支援した。

【インフォメーションギャップを用いたワークシート】



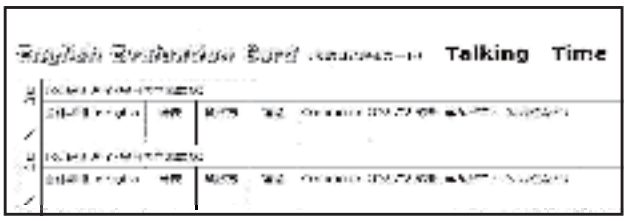
Aのシートを持った生徒は、Bのシートを持った生徒に調理室の場所を尋ね、説明を聞いて調理室の場所が分かる。

Bのシートを持った生徒は、Aのシートを持った生徒に第１理科室の場所を尋ね、説明を聞いて第１理科室の場所が分かる。

ALT の友達が話しているビデオを視聴させ、そのとき尋ねられた場所への行き方をペアで確認してから発表させた。生徒の説明を聞き、ALT が黒板の校舎平面図上で矢印を進め、正しく案内できたかを確認した。時間が足りなくなり、１カ所についての発表で終わってしまった。まとめであるので、時間配分も含めて指導の流れをもっと考えるべきだった。今回は話す活動がメインであったが、道順説明を読んだり、書いたりする活動につなげれば更に定着につながると考える。

自己評価をすることで、分かったこと、できたこと、疑問点を確認することができた。それが、次回以降の授業にもつながるため、今後も続けていきたい。

【自己評価カード】



４　総合的な学習の時間での実践

（１）単元名　「三内丸山学」

～郷土の「財産」に誇りをもち、自分や地域の将来について考えよう～

（２）単元の目標

・地域の文化的財産である三内丸山遺跡についての探究的な学習を通して、課題解決に必要な知識・技能を育成する。

・探究的な学習に主体的・協働的に取り組むことを通して、よりよく課題解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成する。

（３）単元の指導計画

学　習　活　動　と　内　容	時間	評　　価	段階
オリエンテーションを通して、今後の見通しを立てる。 ・事前アンケート　・オリエンテーション	1	地域についての思いを広げ、新たな課題を見いだすことができる。	課題の設定
「三内丸山３つの謎」についてゲストティーチャー（本校１学年教諭による）の講義をもとに理解を深める。	1	講義を通して三内丸山についての理解を深め、調べ学習の観点を明確にすることができる。	
三内丸山遺跡を訪問し、実際の遺物に接し、新たな視点で、当時の人々のくらしについて学ぶ。 ①遺跡見学ガイド　②三内丸山ミュージアム	3	講義と見学で学んだ当時の人々のくらしについて、疑問や新たな発見をすることができる。	
興味・関心のあることをもとに、個人テーマを決定する。	1	解決したい疑問点の傾向をつかみ、個人テーマを決定することができる。	
班のテーマを決定し、学んだことを伝え合い、発表の準備をする。 ・様々な方法で調べ学習をする。 ・発表までの準備計画を立て見通しをもつ。	7	班員と意見を出し合いながら協働的に活動を進めることができる。 学習内容と発表方法を明確にした資料を作ることができる。	情報の収集
テーマごとの発表会を通して、まとめ、表現する力を高める。また、他の班の発表を聞くことで発表内容と発表の仕方を振り返る。 ・６つのテーマごとによる発表をする。 ・付箋を使って良い点や改善点を伝え合う。	1	学習した内容を分かりやすく発表することができる。 発表のよさや改善点を付箋に書くことで、よりよい発表について考えることができる。	まとめ・表現
テーマごとの発表をもとに発表内容を見直し、更によりよい伝え合いを目指して準備する。 （本時１／３） ※次回はテーマが異なる集団に対しての発表会となるので、より分かりやすく修正を加える。	3	改善点について班員と意見を出し合いながら協働的に活動を進めることができる。 学習内容と発表方法を明確にした資料を作ることができる。	整理・分析
テーマの異なるグループ同士での発表会を通して、発表内容と発表の仕方についての意見交換をする。 ・練り直した内容と表現で発表する。 ・他の発表を聞き、意見を述べ合う。 ・他者の意見を参考に、班の活動を振り返る。	1	改善点を生かして、よりわかりやすく発表できる。 良かった点や改善点を見付け、伝え合うことができる。 他者の考えを受け入れながら話合いをすることができる。	まとめ・表現

オリエンテーションでは、今後の活動内容に加えて、ＰＲでも用いるポスター案を提示し、活動のイメージを明確にもたせるようにした。また、アンケートでは現時点で調べてみたいことについて幅広く考えることができた。

【ゲストティーチャーの講話】

ゲストティーチャーの講義では
・三内丸山の語源（アイヌ語との関連）
・当時の海岸線を現在の地図に重ね合わせる
・心身共に豊かな暮らしを支えたもの
等について興味深く学んだ。

【三内丸山遺跡訪問】

三内丸山遺跡では１学級に１名のガイドがつき、遺跡の特徴や遺物の説明を細やかに聞くことができた。実際に遺跡を歩いて巡ることで、遺跡の大きさやここで定住生活を営んだ先人達の日常生活を想起することにもつながった。

個人テーマが似通ったメンバーで班を編成し、個人テーマを追究できるような班のテーマを決定し、調査内容を絞り込んだ。

（例）　縄文時代の人々は手先が器用で創意工夫があったことを、自分で体感したい→土器や狩りの道具を自作して、使い心地を確かめ、それを実物や掲示物で伝える。

【発表内容を絞り込む話合い】

調べ学習では各自でインターネットや学校図書館を利用した。また、青森市民図書館の方々の協力により、生徒が調べたい内容（キーワード）を元に書籍を選定し、長期貸出しを受けることができた。

【テーマごとの発表会】

テーマごとの発表会では、互いに相通ずる発表であることから、学習内容の深さや発表の仕方の工夫について互いに共感し合って、評価できていた。

（例）自分の班も同じ項目を調べていたが、こういう風に発表するやり方もあるのかと気付かされた。

付箋に書いて伝える方法では、今後、まとめた結果が分かるように、掲示物としても活用していく。

【資料をより詳しく提示する】

テーマの異なるグループ同士での発表（各学級単位での発表会）では、それぞれの学びの経過や考察について興味深く聞き、発表の仕方について感じたことや学んだことを意見交換することができた。どの班も前回の発表を踏まえた修正により、発表の仕方や発表内容が深まり、達成感を味わうことができた。

２回の発表会を通して学んだことを中心に話合い、伝え合うこともできた。

これからの課題を決め、今後の取組について具体的に考える。 ・三内丸山遺跡をはじめとした地域にどのように関わるかについて考え、個人テーマを練り直す。	1	学んだことをもとに、新たな課題を見付けることができる。	課題の設定

（４）９年間を見通した学習指導　～小・中学校における学習の系統性～

①学習内容の系統性

本単元「三内丸山学」は、地域の文化的財産である三内丸山遺跡についての学習を通して、自己や地域の今後について考えるものである。三内丸山遺跡は今から約５９００年前から約１７００年にわたって定住生活が営まれていた日本最大級の縄文集落跡である。平成４年からの発掘調査によって、当時の人々の暮らしがそれまでの縄文時代のイメージを覆す、高度な技術をもち豊かな生活を送っていたことがわかり、平成１２年には国特別史跡に指定され、平成３０年度には三内丸山遺跡を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産推薦候補に選定された。先人たちがここで生活を営み発展させてきたことに対する畏敬の念をもち、それにどう関わっていけるかを考えることで学びを深めていけると考え、この単元を設定した。

本中学校区の２つの小学校でも「三内丸山遺跡探検隊」「青森再発見」「わたしたちの日本探検隊」「未来の自分」というテーマで連続性のある地域を生かした教材を学習し、それを通して、将来の自分や地域の未来について発達段階に応じた学習をしてきている。中学校での「三内丸山学」は、それをより深めた学習として位置付けている。

②小中一貫教育としての共通した学習指導法について

総合的な学習の時間においても９年間の系統性をもたせた指導計画を作成し、実践している。中でも地域の特色でもある三内丸山遺跡を小・中学校で取り上げることで、連続性のある学びになると考えている。

各小学校では成長段階に応じて、次のような取組を行っている。

・遺跡の見学
・遺跡訪問とものづくり体験を入れた新聞づくり
・遺跡を含めた三内地区のよさを伝えるガイドマップやパンフレットの作成

（５）本時のねらい

他の班からのアドバイスを効果的に活用して、より魅力ある発表に改善することができる。

（６）本時における「主体的・対話的で深い学び」の視点

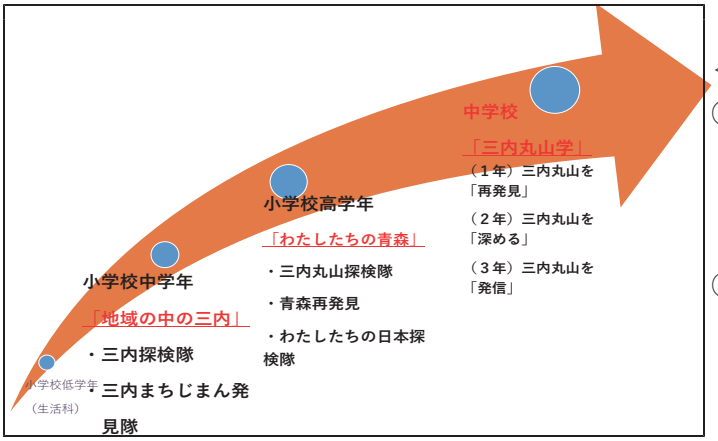
・主体的な学びとして、同傾向のテーマの班から出されたアドバイスをもとに、前回の発表を振り返り、次回の発表に向けた取組に見通しをもたせる。
【振り返って次につなげる】
・対話的な学びとして、他の班からのアドバイスをもとに、対話しながら改善方法を考え、発表に工夫を加える。また、時間内で改善した発表を班同士で見せ合うことで、さらに改善点を見付ける場面を設定する。【協働して課題を解決する】
・深い学びとして、班同士の発表の見せ合いによる相互評価と、本時の学習活動の振り返りの自己評価を通して、今後の活動についての見通しをもたせる。
【自分の考えを形成する】

今後の活動として、新年度４月の修学旅行で三内丸山遺跡ＰＲ活動を予定している（６つのテーマ班での学びを盛り込んだパンフレットを各学級で作成し、それを用いて学級毎にＰＲ活動する）。

個人テーマとしては、「三内丸山遺跡のよさを初対面の人にどうやって伝えるか工夫する」や「地元にいるからこそできるサポートについて考える」などがあがった。

【三内丸山学】イメージ　ポスター（生徒原案）

三内丸山学イメージ図



＜２年生の「三内丸山学」のねらい＞

①一人一人が実社会や実生活の中から課題を見い出し、自ら解決に向けての情報を集め、整理・分析して、まとめ、表現できるようにする。

②個人テーマが似通っている生徒の協働的な活動を通して、探究的な学習の過程における課題解決に必要な知識及び技能を習得させる。

③相互プレゼンテーションを通して、探究的な学習のよさを理解すると共に、情報発信能力を育成する。

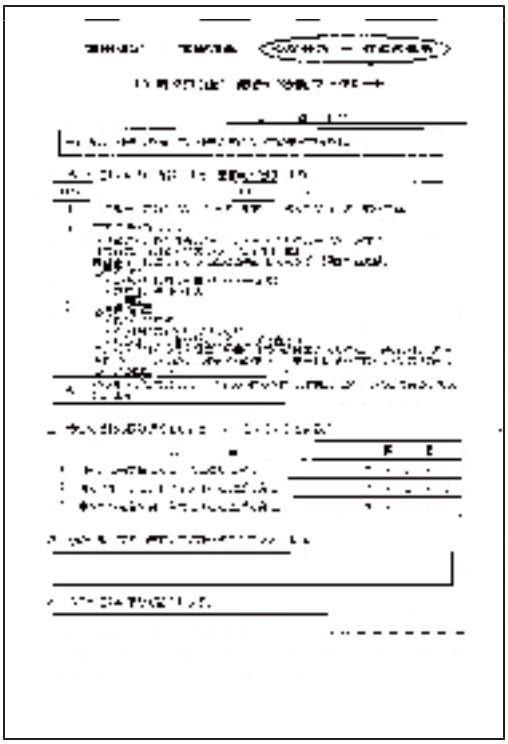
④探究的な学習の成果を、三内丸山遺跡ＰＲ活動の準備等に主体的・協働的に取り組み、積極的に社会に参画しようとする態度を育てる。

＜ＰＲ活動について（予定）＞

・３年生４月の修学旅行時に東京で生徒作成のパンフレット配布

・大型客船の外国人観光客に対する英語ガイドボランティア

【当日のワークシート】



【振り返って次につなげる】

前時の発表のアドバイスを整理・分析することで、班員全員が前時の活動を振り返ると同時に、本時の目標を明確にもつことができ、主体的に次時の活動の見通しを立てやすくなった。

【協働して課題を解決する】

アドバイスを整理・分析することで、他の班の意見を受け入れながら、改善点を協働的に話し合うことができた。また、改善点を明確にした発表をすることで互いの班の考えを共有することにつながった。

【自分の考えを形成する】

自己評価や相互評価を通して、自分や班の達成度をつかむことで、今後について深く考え、明確な目標を立てることができた。また、他の生徒の発表を聞くことで新たな価値に気付くこともできた。

（７）本時の展開（※点線囲みは、校内研「学び合いの工夫」「振り返りの工夫」の設定場面）

段階	生徒の学習内容	教師の指導・助言	評価と留意点
導入 ５分	１　前時の発表を想起する。 ・魅力ある発表の観点を確認する。	・前時の発表を振り返り、今後の活動の見通しをもたせる。 ・魅力ある発表の観点を提示する。	・テーマ毎の教室に分かれる。
展開 32分	２　課題の確認をする。 より魅力ある発表にするために、他の班からのアドバイスを参考にして、発表を練り直そう。 ・学習の流れを確認する。 ３　他の班からのアドバイスをＫＪ法を用いて分類する。 （生徒が行った分類） 〔発表の仕方〕 ・声（大きさ・聞き取りやすさ・表現）、テンポ ・ポスターの工夫（シートをめくるなど） ・立ち位置（メンバーの掛け合い）　・実演の仕方 〔発表内容〕 ・分かりやすさ　・内容の深まり　・考察、感想 ４　分類したアドバイスを参考にして、改善方法を話し合う。 （生徒が行った活動） 〔発表の仕方〕 ・見せるタイミングと見せる角度などを工夫する。 ・掛け合いを繰り返し練習して時間を短縮する。 〔発表内容〕 ・考察に、今後の取組への意欲を付け足す。 ５　話し合った改善方法をもとに、発表の仕方や原稿を修正し、改善した内容で発表し合う。	・活動の流れを提示する。 ・「発表の仕方」と「発表内容」に分類させる。 ・改善策を話し合わせる。 ・活動の優先順位を話し合って決定するように助言する。 ・２つの班がペアになり、相互に発表させる。 ・班員同士で感想を伝え合う。	・ワークシート配付 ・項目は分類しながら自分たちで考えさせる。 【振り返って次につなげる】 評価１（方法：観察） 前時のアドバイスを参考に、次の発表に向けての取組の見通しをもつことができたか。（知識・技能） 手立て：良い点の項目にも注目させ、改善点を見付けるよう助言する。 【協働して課題を解決する】 評価２（方法：観察） 分類したアドバイス等をもとに改善方法を考えることができたか。（思考力・判断力・表現力） 手立て：相手の立場に立った発表を考えるように助言する。 ※どの観点について特に改善したのかを明らかにしてから発表させる。
まとめ 12分	６　今日の活動をワークシートを使って振り返る。 ・今日の感想を発表する。 ７　次時の確認をする。	・評価の観点を確認しながら、ワークシートに記入させる。 ・次時に取り組む活動について記入させる。 ・今日の感想を記入し、発表させる。 ・次時の確認と教師からの助言を行う。	【自分の考えを形成する】 評価３（方法：ワークシート） 相互評価や自己評価の場面を通して、今後の活動に見通しをもつことができたか。（学び合う力、人間性） 手立て：改善が見られた点について評価し、意欲をもたせる。

『魅力ある発表の観点』は、発表の準備段階から生徒に繰り返し提示し意識させた。

〔発表の仕方〕
①伝えたいことが整理されている。
②聞き手が聞き取りやすい声量とスピードで話すことができている。
③効果的に視覚に訴えることができている。
〔発表内容〕
④聞き手が三内丸山遺跡や縄文時代について新たな発見をすることができる。
⑤考察や感想など、班員の学びの経過がわかり、思いが伝わってくる。

この観点を基に準備を行うことで、資料の提示の仕方や発表方法のレベルが上がり、より向上心をもって発表活動に取り組むことができた。

本時の学習内容について、『学習の流れ』を提示し、更に詳しく具体的な内容を示すことで、生徒が見通しをもって活動することができた。

【本時の『学習の流れ』】

【『学習の流れ』の例】

ＫＪ法を用いて、仲間からのアドバイスを分類・分析する場面では、類別しながらアドバイスの項目を自分たちで考えることができた。それにより、自分たちの発表の魅力や改善点に気付き、より向上を目指した活動へと主体的に取り組むことができた。

【ＫＪ法を用いた分類・分析】

改善のポイントを明確にした後、本時の中でできる視点で優先順位を考える場面を確保したことにより、全員の取り組むべきことが明確になった。

改善した内容の発表では、どの観点について改善したのかを相手に宣言してから発表させた。そうすることで発表する班は、意識を高め、よりよい発表を目指すことになり、発表を聞く班は、的を絞ったアドバイスをすることができ、双方に有効であった。

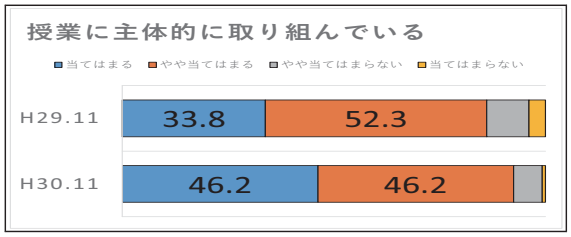
【相互に発表・評価し合う】

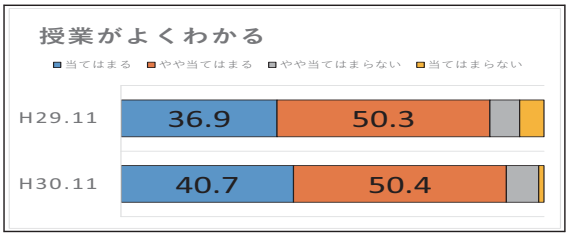
自己や班の今日の活動を振り返り、班員で共有することで今後の活動についての見通しをもつことができた。また、本時を通して「話合いの心得」を意識させ、発表をした生徒、発表を聞いた生徒双方が達成感をもつことができ、今後の活動への意欲につながった。

５　研究のまとめ

（１）生徒の変容

①　小中一貫教育「目指す子ども像」に関する生徒意識調査の結果より





・授業に主体的に取り組む生徒を育成するための学習スタイル（「自分の考えをもつ」「自分の考えを伝える」「反応を返す」）が定着してきており、またそれに伴い、授業がよく分かるという数値が向上してきている。また、ペアや小集団による学び合いがスムーズに進められるようになってきた。

②　県学習状況調査〔学習に関する知識や実態（質問紙調査）の結果〕より＊３０年度は自校のみの調査

数値は、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた生徒の割合。(H.29→H.30)

（１）授業では、自分の考えをもつことができていると思う。	７８．１％　→　８７．３％
（３）授業では、学級の中で、互いの考えを話し合う活動をよく行っていたと思う。	８４．６％　→　９４．４％
（４）授業ではいろいろな考えを聞き、自分の考えを深めたり広げたりしていると思う。	８１．０％　→　８８．９％
（６）授業の最後に学習したことをまとめる活動がよく行われていたと思う。	８９．１％　→　９０．５％
（７）授業の最後に自分の学習への取り組みの様子などを振り返る活動がよく行われていたと思う。	７４．４％　→　７５．４％

・昨年度と今年度の中学２年生の比較からも、教師の「分かる授業」の工夫によって、生徒の学習意欲が向上した。

・２つの小学校の「発表の約束」との系統を図った「三中生話合いの心得」における、発表の仕方や聞き方、話合いの進め方を共通の取組として実践したことで、小学校からの学び方が継続され、根拠や理由をはっきりさせて発表する姿が多く見られるようになった。また、学習活動により学びに深まりが見られるようになり、個々の自己有用感につながってきた。

（２）研究の成果

①　主体的な学習の基盤となる学習習慣の育成

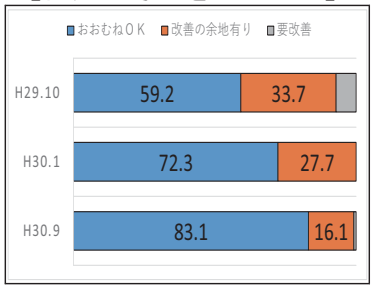
・小・中学校の共通した「学習の約束」と９年間を見通した「家庭学習の手引き」を作成し、授業規律においては、小・中学校で共通実践ができた。

・小学校の「発表の約束」との系統を図った「三中生話合いの心得」を作成し実践することで、「聞き方」、「話し方」の約束をしっかり行わせることができてきた。また、話合いの場面では、自分の考えと比べたり、意見を付け加えたりするなど、小学校での指導方法が継続でき、話し合う内容を深めさせることができた。

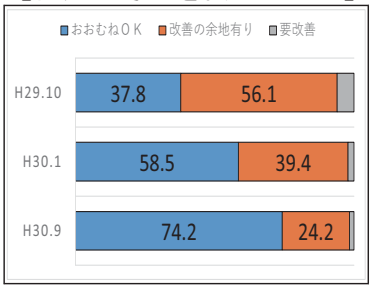
・３校共通の授業に主体的に取り組む子どもの姿を「○自分の考えをもち、○自分の考えを友達に聞こえる声で話し、○友達の話を最後まで聞き、反応を返す」と定義し、それを育成するために教師全員が実践した。これにより指導の一体化と授業の改善が図られ、年３回の教員自己評価からも意識の向上を確認できた。

○小中一貫教育「目指す子ども像」に関する教員の取組結果より

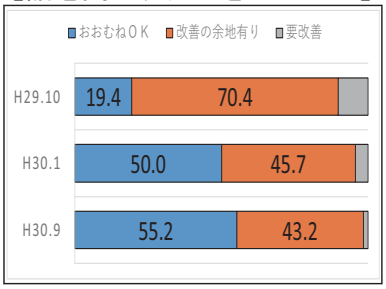
【自分の考えをもたせる】



【自分の考えを伝えさせる】



【話を聞き、反応を返させる】



・「分かる授業」の支えとなるユニバーサルデザインの視点を取り入れ、視覚化の工夫（ICT機器の活用、分かりやすい掲示物等）、焦点化の工夫（共通の「学習課題」・「まとめ」シートの活用、単元や１時間ごとの「学習の流れ」の掲示、簡潔で分かりやすい指示や説明の工夫等）、共有化の工夫（ペアや小集団の活用等）を全教員が共通実践した。

② 自己有用感をもてる分かる授業

○主体的な学びを実現するために、「課題解決の見通しをもたせる工夫」、「思考や気付きを促し、表現力を高めるための発問や指示の工夫」、「学び合う協働的な活動の工夫」、「振り返りの場の設定と評価の工夫」を共通実践事項として全教員で取り組んだ。

・「課題解決の見通しをもたせる工夫」として、単元や本時の学習の流れを提示すること、小学校での学びや今までの生活体験、前時の学習につながりのある学習課題を設定し、生徒の興味・関心を高め課題意識をもたせること、課題解決のための手順や方法を明らかにすることで見通しをもたせた。特に、前時の復習を行い既習事項を確認し活用させたり、グループや全体で個々の考えを確認し合う場を設けたりすることは、見通しをもたせる手段として効果的であり、個々の発表意欲にもつながった。

・「思考や気付きを促し、表現力を高めるための発問や指示の工夫」として、思考ツールを活用することで考えを整理したり、よい見本の提示することでよりよい表現の仕方を工夫したり、小集団の中で練り合ったりすることで表現力を高めさせることができた。特に、話合いの心得を意識して取り組ませることは有効な手立てであった。

・「学び合う協働的な活動の工夫」として、学習活動のねらい（何を・どのように・何のために・どうするのか）を明確にして、ペアや小集団での活動に取り組ませた。また、各教科・道徳・学級活動・総合的な学習の時間において、それぞれの話合いの仕方のフォーマットを作成し共通実践した。特に総合的な学習の時間では、小集団の中での練り合いを充実させることで、探究的な学習に協働的に取り組み、見方・考え方を育成することができた。

・「振り返りの場の設定と評価の工夫」として、何をどの程度学んだか（分かったこと・できるようになったこと・新たな疑問・友だちの考えで参考になったこと・これからの学習や生活に生かしたいことなど）を文章記述させたり、観点別で自己評価させたりすることで、学びの連続性を意識させることができた。

③ ９年間を見通した教育課程の編成と実施

・外国語活動と英語科の９年間の単元系列一覧を作成し、到達目標や指導内容を明確にすることができた。小学校の活動を生かし、英語を話す楽しさを大事にして中学校の学習につなげることで、生徒はペア活動に意欲的に取り組んだ。また、つまずきが予想される学習内容には、ＩＣＴ機器等を活用して分かりやすく支援することができた。

・国・社・数・理では学習状況調査と標準学力検査の通過率の低い項目を洗い出し、「９年間の単元配列表」に、どの時期に、どのような対策を講じるのかを教科部会で話合い、日常の授業や小学校への乗り入れ授業等で改善するための指導を取り入れることができ

た。

・総合的な学習の時間では、地域を教材化した学習（小学校「三内丸山探検隊」「青森再発見」「わたしたちの日本探検隊」「未来の自分」、中学校「三内丸山学」）の系統性と連続性を図り、学習を進めることができた。

④　学校間連携体制の実施

・中学校１年の道徳では小・中学校の教員がティーム・ティーチング（小学校教員がT2）で月１～２回のペースで実施した。相互授業参観や指導案の共同作成により、生徒の本音を引き出したり、よりよい生き方について個人の考えを深めたりすることができる発問構成やワークシートなど、小学校の授業形態を中学校の授業に生かすことができた。さらに、内容項目の系統性や発展性を意識した指導にもつなげることができた。

（３）　今後の課題

①　主体的な学習の基盤となる学習習慣の育成

・家庭学習は学年が上がるにつれて取組は向上しているものの、家庭学習に向かう意識はそれほど高くはない。今後は小・中学校が一体となった取組をする必要がある。また、９年間の家庭学習の手引きを土台にして、家庭との協力を図ることと、中学校の学年段階に応じた各教科の取組内容を作成し、宿題の量、バランスを検討し改善に努めていく。

②　自己有用感のもてる分かる授業

・学び合いの場において、言語能力が伝え合うことの支えとなるので、「話合いの心得」を基にして、考えるための技法や必要に応じて思考ツールや図などを使い、聞く力、話す力が向上するよう指導にあたっていく。

・授業の終末段階における「振り返り」は、各教科で工夫しながら進めている。今後は生徒が学びを実感し、学びの意欲や課題意識を次の学びにつなげていけるような視点をもって毎時間の振り返り項目と単元末の振り返り項目について、記述の仕方や自己評価と相互評価の内容を検討していく。

・「主体的・対話的で深い学び」を実現するための課題づくりや提示の仕方、見通しのもたせ方、自力解決、学び合い、まとめ、振り返りまでの１時間の流れをイメージした授業づくりを、小・中学校が協働して行う「三内中学校区学びのスタンダード」を確立していく。

③　９年間を見通した教育課程の編成と実施

・学習状況調査（全国・県）と標準学力検査（NRT）の通過率の低い項目を洗い出し、日常の授業や小学校の乗り入れ授業等で、既習事項の復習や段階を踏んだ丁寧な指導に取り組んでいるが、今後は指導計画の段階で学習内容に幅をもたせるなど弾力的な指導計画を実践する必要がある。

④　学校間連携体制の実施

・児童生徒の意識調査及び教師の自己評価を実施し、結果を受けて取組の改善を図っているが、主体的な学びの授業改善に向けて評価項目と行動計画の見直しをする必要がある。